

読みながら貼る！または貼ってから読む！

資料を読み終えた後、「誰が出てきましたか？」「何と言いましたか？」「次にどうなりましたか？」等、矢継ぎ早に質問をしがちです。しかし、国語の読解の授業ではないので、他の活動にもっと時間をかけたいですね。1学期に行われたどの授業でも、状況を捉えやすくするために短く改作した資料を提示していました。また、黒板に状況が分かる掲示物を資料を読みながら貼ったり、貼ってから読んだりしていました。



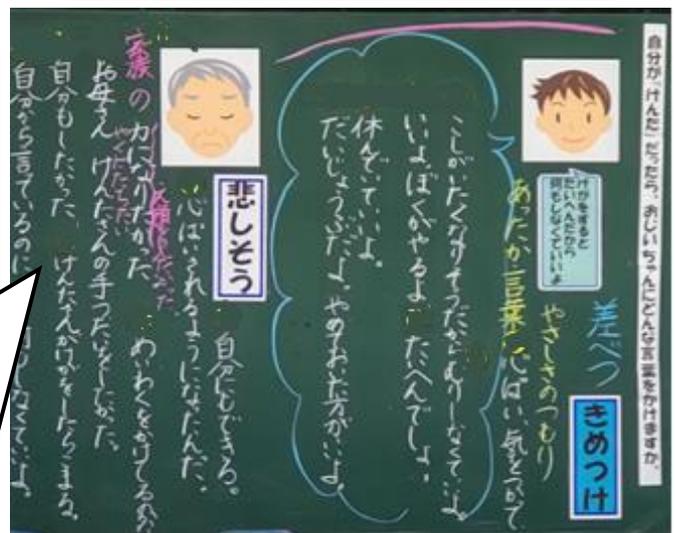
資料を読み終わるころには、状況が整理された板書ができあがっていました。なるほど！さすがです。

自分の見つけめ方&見つけめ直し方！



5学年実践の導入では、事前に描いていた「自分が思う『肌色』」を塗った絵を提示していました。そして、資料から肌の色で差別を受けるダブルの子の思いを考えました。授業が終わるころには、パールオレンジ(うすだいたい)を肌の色として当たり前塗っていた自分には、実は**多様性を尊重していない自分が隠れていた**ことに気付く姿が見られました。

3学年実践では、「自分なら、おじいちゃんにどんな言葉をかけるか」を話し合いました。「無理なくていいよ」「やめておいた方がいいよ」と考えた子たちは、資料の続きを読む中で、おじいちゃんに『自分も家族の力になりたいのに…』という気持ちがあることに気付いていきました。**自分目線ではなく、相手目線で考えることの大切さ**について、自分を見つめる姿が見られました。





2学年実践の導入では、「遊び」に男の子の遊びや女の子の遊びがあるかについて話合いました。「人形は女の遊び」「これは男の遊び」と言い合っていました。資料の中で「女の子の遊びをしている」と言われて、ショックを受けている男の子の思いを考えました。授業を通して、「遊びに男の子も、女の子もない」「好きな遊びをすればいいんだ」と**多様性について大きく考えを変える**子どもの姿がたくさん見られました。

5学年実践では、Aさんが外国に行ったときに受けた差別について考えました。授業の終盤に、実はAさんはインドネシア人であり、差別を受けた外国が日本であることを知りました。そして、事前アンケートを見返す中で、**自分にも外国人に対する偏見や差別意識があったのではないかと自分を見つめる**子どもの姿がありました。

